

歴史民俗資料館だより

アイロン

アイロンは、鉄製のプレートを加熱し、その熱と圧力によって布地のしわを伸ばしたりするものです。日本では『熨斗ひのし』や『熨斗ひのし』がそれにあたり、少なくとも平安時代から使われてきました。江戸時代に伝えられた西洋式のアイロンは、洋服に適した形状であったため、その普及とともに広く用いられるようになりました。

一方従来からあった熨斗ひのしや熨斗ひのしは、和服中心に使われました。

熨斗ひのしは、着物の仕立てをするとき縫い代を割つたり袖口を仕上げるのに用いる鉄製の熨斗ひのしです。火鉢などに炭火をおこし、熨斗ひのしを熱して布の上からあてました。熨斗ひのしの焼け具合は、ほおに近づけたり、指につばをつけて素早く触ってみたりして確かめ、別の布にあてて熱を調整するなどして使用しました。

熨斗ひのしは、炭火を入れてその熱により布類のしわ伸ばし

や仕上げに用いる道具です。多くは、真鍮製で、底が平らな円筒形の鍋のような形をしており、柄がついています。中に炭火を入れて布に底をおしあて洗濯後のしわや裁縫のあとの仕上げに使用しました。平安時代には、同じものが貴族の蒲団まくらを温める道具として用いられました。この熨斗ひのしのあとを受けて火アイロンが登場しました。

火アイロンは、プレートの加熱方法により、本体を火の近くに置いたり、ストーブにのせたりして、加熱するフラットアイロンとアイロン内に炭火を入れて加熱する炭火アイロンがありました。炭火アイロンは、鉄の籠かごにハンドルをつけたような形でしたが、明治の中ごろから、アイロン内での火おこしを容易にするため後部に空気取り入れ口をつけ、前部は煙突のような空気抜きを持った形が普及し始めました。さらに明治後半には、スチーム機能付きのものも登場しました。

熱源は、炭火のほか明治三十四年（一九〇一）ごろから電気

による電気アイロンが出てきましたが、一般に普及するのは、昭和二十年代後半でした。

資料館では、民俗資料として熨斗ひのし、熨斗ひのし、炭火アイロンを展示しています。



▲熨斗 ▼熨斗



▲炭火アイロン

ごみ減量化コーナー



庭のお手入れで出た草や枝葉を処分される時には「乾かす・土を払う」を習慣にしましょう。

草の入ったごみ袋が重いのは、抜いたままの草に大量の土が付いていることが原因です。

草は必ず乾かして、土を払いましょう!



1人一日100グラムごみ減量運動実施中

たった100グラムの減量でも、全町民で取り組めば、年間810トンものごみを減らすことができます。